<49年度医療体系研究会分担研究>

# 青少年の職業観・職業意識と看護婦不足問題

岡本　英雄

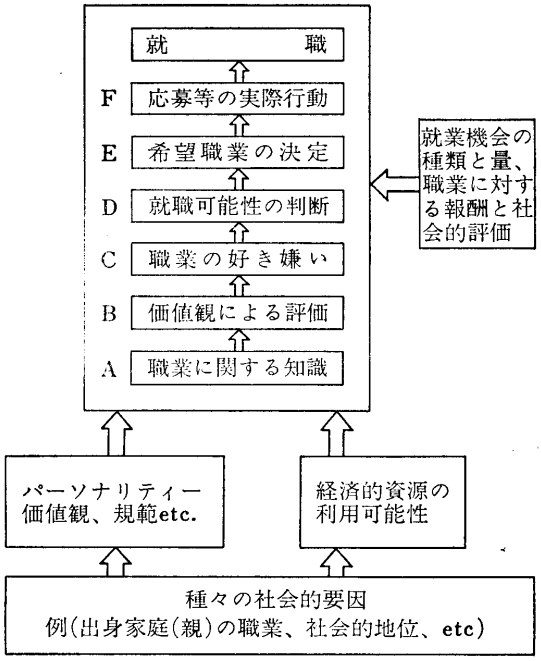
## 1. はじめに

看護婦不足の原因は，決して単純ではない。看護婦不足ということは，看護婦の需要に比して供給が少ない，ということであるから，単に供給の側だけでなく，需要の側も当然検討しなければならない。しかし，ここでは需要の検討は他にゆずり，供給の問題だけをとりあげる。

供給は新規の入職と再就職の数によって決定され，退職者の数を考慮に入れると，正味の増減が決まる。ところが，再就職と新規の入職はかなり性格が異なるので，別個の問題として論じたほうが適切であろう。そこで，ここでは，一応新規の入職のみを考察の対象とする。この新規の入職に際して，人々の職業観・職業意識がどのような影響を与えているかをみるのが本稿のテーマである。

## 2. 職業選択の過程

人々がどのように職業を選択するか，という問題に関する理論は現在のところできあがっていないといえよう。著名なものとしてはD.E.Super の自己概念説，A.Roeの欲求理論などがあるが，いずれも一定の説得力をもつと同時に，これでは説明しきれないという感じを残す。そこで，一応ここでは筆者なりの職業選択の図式をかかげておく（図―1）。まず最初に，いろいろな職業についての知識があり，それを各人がもっている価値観によって評価すること




図―1　職業選択の図式

によって，職業の好き嫌いがあらわれる。この好き嫌いの序列に，実際に就職できるかどうかの判断が加えられて，単なる好き嫌いでない希望職業というものが決定される。これに従って，応募等の実際行動がとられ，採用側に受け入れられれば就職ということになる。

もちろん，これは便宜的な図式であって，図—1のAからFの段階は必ずしも一方的に矢印の方向へ進むだけとは限らない。例えば，職業に関する知識は価値観のフィルターを通して得られることも多い。また好き嫌いが実際の可能性の大きさの影響を受けることもある。しかし，分析のための図式としては図のようなプロセスを仮定しておくことは妥当であろう。

このようなプロセスに影響を与える要因としては，その個人の属する社会階層的地位，居住地域あるいは育った地域，家族内の地位，性，年齢，親の職業などが考えられる。この他にも肉体的な要因（例えば体力の強さ，視力など）もあるが，ここには社会的な要因のみを掲げておいた。

さて，これは職業選択の図式であるが，人々はその前に職業につくかつかないかの選択をしなければならない。男子の場合は，職業につくことは当然のこととされているから，職業につくかつかないかの問題は，進学か就職かという問題としてあらわれる。ところが，女子の場合には進学，就職の問題の他に結婚という問題がある。

現在では，学校を卒業した後は，女性でも就職することが一般的になってきているから，その時点では男子と同じように進学か就職かという選択が問題になる。しかし，一つの選択は孤立しているわけではなく，その後に続く方向をある程度制限することになる。従って，就職するにしても，生涯その職業を続けるつもりであるか，それとも結婚するまでの仕事として選ぶのかによって選択する職業も異なってくる。

このために，女子の職業選択はいっそう複雑な問題になるが，現在のところこのような観点から看護職への入職問題を検討した研究は筆者の管見の範囲内では存在しない。そこでこの問題については，ごく一般的に述べるにとどめ，看護婦と特に関連させて論ずるのは職業選択の図式のA段階の職業知識とCの好き嫌い，それにすでに希望職業を決定して看護学校入学という行動をとった人たちの属性や意識の問題とする。

### 2—1　女性のキャリア選択

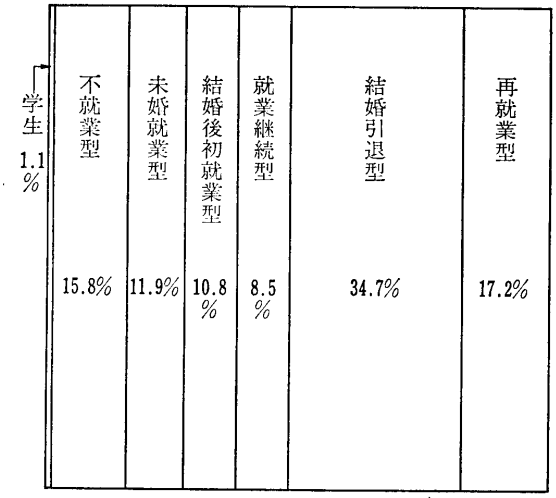
キャリアという言葉はいろいろな意味で用いられるが，ここでは人の一生の中で続けられる職業経歴といった意味に用いる。女性は，一生職業につかないという人生を送ることもあるし，結婚するまで，あるいは子供が生れるまで仕事を続けて，後は引退することもある。このような職業の継続と結婚，出産とを関連させて，いくつかのキャリアのタイプをつくり，女性がどのようなタイプを望ましいと考えているかを示したのが表—1である。この調査は，首都圏（東京駅を中心とした半径50kmの円内）に居住する20歳以上60歳未満の女性を母集団として，無作為に抽出された1,800人を対象として，職業研究所が昭和50年に行なったものである。

表—1　女性のキャリア観　　(職業研究所調査　1975年)

| | | よい職業をもたないほうが | 結婚まではもったほうがよい | ったほうがよい子供ができるまではも | かぎり続けるのがよい子供ができても可能な | がよいなったら再就職するの子供がある程度大きく | その他 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 計 | 1,405 | 7.5 | 14.2 | 9.5 | 21.0 | 41.6 | 1.8 | 4.6 |
| 20～24歳 | 162 | 4.9 | 21.6 | 14.2 | 25.9 | 29.0 | 1.2 | 3.1 |
| 25～29 | 230 | 4.8 | 15.2 | 10.4 | 23.0 | 43.5 | 1.3 | 1.7 |
| 30～34 | 277 | 6.5 | 12.6 | 6.1 | 23.5 | 45.8 | 1.8 | 3.6 |
| 35～39 | 205 | 6.8 | 11.2 | 13.2 | 17.1 | 44.4 | 1.5 | 5.9 |
| 40～44 | 188 | 5.3 | 12.2 | 4.8 | 23.9 | 46.8 | 1.6 | 5.3 |
| 45～49 | 137 | 15.3 | 12.4 | 10.9 | 13.9 | 35.8 | 3.6 | 8.0 |
| 50～54 | 118 | 10.2 | 20.3 | 7.6 | 19.5 | 36.4 | — | 5.9 |
| 55～59 | 88 | 12.5 | 8.0 | 10.2 | 14.8 | 44.3 | 4.5 | 5.7 |

これによると，子供が小さいうちだけ家庭におり，子供がある程度大きくなったらふたたび仕事に戻るという，いわゆる再就職型を望ましいとしているものが最も多い。二番目に多いのは「子供ができても可能な限り続ける」というタイプであるが，再就職型と比較すると半分にしかすぎない。「結婚するまで」と「子供ができるまで」とを合計すると24%で，「子供ができても続ける」より多くなる。「まったく職業をもたないほうがよい」というのは8%であった。

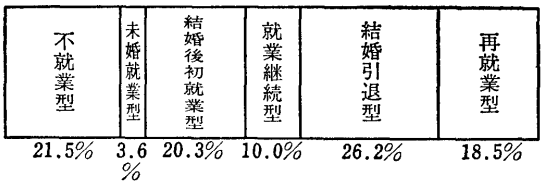
この表は年齢別に集計されているが，年齢による差は比較的少ない。差が目立つのは「職業をもたないほうがよい」と「子供ができても」の二つのタイプである。この年齢別の差が少ないということは，この質問に対する解答が一人一人の生活から導きだされたものではなく，世間一般でそれが望ましいとされているからそう答えておいた，といったいわゆるタテマエ論が




図—2　職業経歴のタイプ（全体）

かなり含まれているのではないかという想定を許すかもしれない。

次に，意識ではなく実際にどのようなタイプのキャリアをもっているかを調べると，図—2，図—3のようになる。図—2は調査対象者全員についてのものであるが，そこには年齢の若い人も含まれる。彼女たちは，まだ未婚であった




**図—3** 職業経歴のタイプ（40歳以上）

り，子供がいなかったりで，今後どのようなキャリアをとるかまだ確定していない。そこで，ほぼキャリアが固まったと思われる40歳以上の人についてキャリアのタイプを図示したのが図—3である。最も多かったのは結婚引退型で，全体の1/4をこえ，次いで不就業型すなわち一度も職業についたことのない人たちである。あまりこれまでとりあげられることのなかったタイプである結婚後初就業型，すなわち結婚前は仕事についたことがなかったけれども，結婚後はじめて就業したというタイプが意外に多かった。これは，彼女たちが学校を卒業した当時は，女子が就業することはあまり一般的でなかったので仕事につかなかったが，その後の時代変化により就業するようになったもので過渡的なタイプといえよう。

職業別には，看護婦が含まれる専門・技術的職業は他のタイプより未婚就業型が多くなっている。

そこで，今後の動向であるが，まず未就業型というのはほぼ確実に減少する。増加するのは再就職型である。結婚引退型はどう動くか推測しにくい。未婚就業型にはあまり大きな変化はみられないと予想される。結婚後初就業型は先に述べたとおり，過渡的なタイプであるから，長期的にみれば減っていく。

女性のキャリア選択がこのようなものであれば，それは当然看護婦を選択するかどうかに関連してくる。すなわち，一般にいわれているように，看護婦という職業が主婦業と両立しにくいものであれば，未婚就業型が増加しないと看護婦を選択する人は増えないことになる（もちろん，未婚就業型の人が多い他の職業との相対的な魅力が変化しないとして）。逆に再就業型が増えることを前提とするならば，それに適合するように看護職のありかたを変容させなければならないであろう。

この問題はきわめて重要であるが，現在のところ正面から扱った研究が見当らないようなので，今後の課題として機会をみてとりあげたい。

## 3. 看護婦に関する職業知識

人々の職業知識は，それぞれの職業の状況を客観的に正しく受けとめているとは限らない。むしろ，部分的であり，ゆがんでいる場合が普通である。しかし，その知識が職業選択の基礎となるのであるから，どのように偏っているか，どの部分のみを知っていて，どの部分については知っていないかを調べておくことは重要である。

ところが，職業知識に関する調査研究は現在のところ非常に少ない。看護婦に関する職業知識を含む調査として，筆者の目にふれたのは昭和48年に職業研究所が行なった「職業の認知構造に関する研究」（担当，宮崎利行，渡辺三枝子）くらいである。次に同調査の看護婦に関する部分をまとめておく。

表—2　看護婦に関する知識

| | | 中学1年 | 中学3年 |
|---|---|---|---|
| 看護婦 | 保健婦 | 4.8(%) | 11.2(%) |
| | 助産婦 | 1.4 | 1.5 |
| | 看護婦 | 64.8 | 46.3 |
| | 病人付添人 | 22.4 | 35.8 |
| | 病院雑務者 | 6.7 | 5.2 |
| | | $N=210$ | $N=134$ |

この調査では看護婦の仕事を正しく理解しているかどうかを調べるために，保健婦，助産婦，看護婦，病人付添人，病院雑務者の職務内容を数行で述べた文章をあげておき，看護婦の職務を述べたものはどれか当てさせた。この結果，看護婦では正答率が中学1年で65%，中学3年で46%(サンプル数はそれぞれ210名，134名)であった。この正答率は警察官，新聞記者，医師に関する数字より低いが，コックや建築技術者よりは高くなっている。

回答の分布は表—2のとおりである。混同が多いのは，病人付添人との混同である。ここでは，准看護婦との区別は調べていないが，付添婦との区別がつかないものが相当数いることから推測すれば，正看護婦と准看護婦との区別ができないものがほとんどであろう。つまり，一般の中学生は病院で患者の面倒をみる仕事は，雑務者を別として特に区別していないと考えたほうがよいであろう。

一般に，病人付添人は看護婦より学歴，知識，技能において劣っており，単純業務にしか従事しない。従って，看護婦がそれと混同されることは，看護婦にとってイメージが下がることになる。この点は，看護婦希望者の数に影響を与える重要な要因の一つであろう。

同調査はまた，職業名をあげて，それぞれの職業に公的な資格が必要かどうかを質問している。それによると，看護婦についての正答率は中学1年で78%，中学3年で94%であって，この点に関してはほぼ正しい知識をもっているといえる。

資格については，中学1年より中学3年のほうが正答率が高くなっていて，常識的な結果となっているが，職務内容については1年のほうが3年より正答率が高い。この理由については，仮説的な説明はあるが，明確になっていない。いずれにしても，付添人との混同が多いことは確かである。

## 4. 看護婦の職業イメージ

前項では，職務内容と資格が必要かどうかについての知識を調べているが，次にもう少し範囲を拡大して，看護婦の職業的特性を人々がどうとらえているかを調査したものを次に紹介する。

この調査は「職業イメージ調査」とよばれ，職業研究所が昭和45年に全国の中学生，高校生を対象として調査したものである（担当，岡本英雄)。調査方法は，具体的な職業名をあげ，それぞれの職業について例えばその仕事は単調であると思うかどうかなどと質問した。質問にとり入れられたイメージの構成要素は

仕事の内容に関するもの

(1) 単調かどうか

(2) 自律性の有無

(3) 疲労度

仕事に付随するもの

(4) 収入

(5) 作業環境の良否

(6) 作業による身体の汚れの有無

(7) 早朝，深夜の労働の有無

(8) 日曜，祝日の労働の有無

社会的評価

(9) 世間の評価の高低

(10) 親の反対の有無

教育，訓練

(11) その職業に必要な技能や知識を得ることが難しいか否か

その他

(12) その職業の将来性

(13) 自己の適性との関係

表—3(1) 職業の好まれる順位（中学）

| 男 | | | 女 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 機械・化学技術者 | 60.1% | 1 | アナウンサー | 51.5% |
| 2 | 大きな会社の社長や重役 | 60.1 | 2 | 洋服のデザイナー | 45.5 |
| 3 | プログラマー | 41.6 | 3 | 新聞・雑誌の記者 | 43.1 |
| 4 | アナウンサー | 37.1 | 4 | タイピスト | 39.5 |
| 5 | 新聞・雑誌の記者 | 35.4 | 5 | 栄養士 | 37.7 |
| 6 | 喫茶店・すし屋などの経営者 | 30.9 | 6 | 理・美容師 | 36.0 |
| 7 | 警察官 | 27.5 | 7 | 大きな会社の社長や重役 | 35.9 |
| 8 | 大　工 | 25.8 | 8 | 喫茶店・すし屋などの経営者 | 32.9 |
| 9 | 医　師 | 18.5 | 9 | プログラマー | 31.7 |
| 10 | 中学・高校の先生 | 18.5 | 10 | 看護婦 | 31.1 |
| 11 | 大型トラック運転手 | 16.9 | 11 | 電話交換手 | 30.5 |
| 12 | 会社・銀行などのサラリーマンやオフィスガール | 16.3 | 12 | デパート店員 | 25.7 |
| 13 | 小売店の店主 | 16.3 | 13 | 商店の店員 | 24.0 |
| 14 | 溶接工 | 15.7 | 14 | 小売店の店主 | 21.6 |
| 15 | 理・美容師 | 13.5 | 15 | ウェイトレス | 21.0 |
| 16 | 商店の店員 | 12.9 | 16 | 会社・銀行などのサラリーマンやオフィスガール | 21.0 |
| 17 | 電機冷蔵庫の組立 | 12.9 | 17 | 中学・高校の先生 | 19.8 |
| 18 | 農　業 | 10.1 | 18 | 注文服の仕立 | 19.8 |
| 19 | セールスマン | 10.1 | 19 | バス車掌 | 19.8 |
| 20 | オートメーション工場の機械運転員 | 9.0 | 20 | 医　師 | 15.0 |
| 21 | 印刷工 | 7.9 | 21 | 靴下編工 | 6.6 |
| 22 | メッキ工 | 7.9 | 22 | 農　業 | 5.4 |
| 23 | 注文服の仕立 | 2.8 | 23 | セールスマン | 4.2 |
| 24 | 自動車整備工 | 1.1 | 24 | テレビ組立係 | 1.2 |

⒁　その職業につきたいか否か

以上の14項目をとりあげた。

まず看護婦に限定せず，職業イメージと就業希望について述べる。最初に，中学生ではついてもよい，と思うかどうかによって，希望されている職業を調べるとアナウンサーが１位，洋服のデザイナーが２位で，看護婦は24種呈示した職業のうち10位であった。これが高校生になるとトップに洋服のデザイナーが上がり，２位は栄養士である。看護婦は高校生では24種中で15位に下がっている。「やってもよい」と答えた人が中学では31％いたのに，高校では19％しかいなくなっている。もちろん，この調査は同一対象を中学のときと高校のときに調べたもの

表―３(2)　職業の好まれる順位（高校）

| 男 | | | 女 | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大きな会社の社長や重役 | 73.2% | 1 | 洋服のデザイナー | 62.0% |
| 2 | 機械化学技術者 | 64.1 | 2 | 栄養士 | 57.4 |
| 3 | 小売店の店主 | 45.3 | 3 | アナウンサー | 57.0 |
| 4 | 喫茶店・すし屋などの経営者 | 42.6 | 4 | 電話交換手 | 49.2 |
| 5 | プログラマー | 35.9 | 5 | 新聞・雑誌の記者 | 43.4 |
| 6 | 自動車整備工 | 30.9 | 6 | 小売店の店主 | 43.4 |
| 7 | アナウンサー | 30.5 | 7 | 大きな会社の社長や重役 | 38.8 |
| 8 | 大　工 | 29.2 | 8 | 会社・銀行などのサラリーマンやオフィスガール | 37.2 |
| 9 | 新聞・雑誌の記者 | 28.5 | 9 | タイピスト | 34.3 |
| 10 | 医　師 | 21.1 | 10 | 喫茶店・すし屋などの経営者 | 33.1 |
| 11 | 大型トラック運転手 | 19.1 | 11 | 理・美容師 | 29.3 |
| 12 | 警察官 | 17.8 | 12 | プログラマー | 29.3 |
| 13 | 会社・銀行などのサラリーマンやオフィスガール | 16.8 | 13 | 中学・高校の先生 | 26.0 |
| 14 | 中学・高校の先生 | 15.8 | 14 | 注文服の仕立 | 20.7 |
| 15 | 農　業 | 15.1 | 15 | 看護婦 | 18.6 |
| 16 | 理・美容師 | 14.8 | 16 | バス車掌 | 17.4 |
| 17 | セールスマン | 11.4 | 17 | デパート店員 | 15.7 |
| 18 | 溶接工 | 9.4 | 18 | 商店の店員 | 15.3 |
| 19 | 印刷工 | 8.4 | 19 | ウェイトレス | 11.6 |
| 20 | オートメーション工場の機械運転員 | 8.1 | 20 | 医　師 | 9.9 |
| 21 | 注文服の仕立 | 8.1 | 21 | 農　業 | 6.2 |
| 22 | 商店の店員 | 8.0 | 22 | セールスマン | 3.7 |
| 23 | 電機冷蔵庫の組立 | 6.0 | 23 | テレビ組立係 | 1.2 |
| 24 | メッキ工 | 4.0 | 24 | 靴下編工 | 0 |

ではなく，同時期に中学生と高校生を別々に調べたものである。従って，31％から19％に減るといっても，中学のときに「ついてもよい」と考えていた31％のうちの10数％の人がつきたくなくなったことを示しているわけではない。しかし，多少の出入はあるとしても，中学のときに「ついてもよい」と考えていた人のかなりの部分が高校生になると「ついてみたくない」に変わることはおそらく確かであろう。

呈示した24種の職業の好まれている順位は表—3のとおりであるが，上位にきているのは専門・技術的職業，管理的職業が上位であり，下位には技能工・生産工程従事者，農業，サービス的職業がきている。看護婦は中学生では中学・高校の先生より好まれているが，高校では逆転している。

次にこのような職業の好き嫌いにはどのような要因が影響しているかを検討する。各質問項目において「はい」と答えた人の百分率の大きい順に職業をならべ，これと先にあげた就職希望者の多さによってならべた順位の相関から，どの要因が職業の好き嫌いに影響しているかを調べた。

両者の順位相関係数を計算すると，最も高い数値を示すのは「適性」で，次いで「将来性」，「収入」となっている。一方，好まれる順位と逆の相関を強く示しているものは「社会的評価の低さ」，「親の反対」などである。そして，ほとんど相関がないのが「日曜や祝日に休めない」，「体が疲れる」などである。

**表—4　好まれる順位と各項目との順位相関係数**

| 項　　目 | 中学男子 | | 中学女子 | | 高校男子 | | 高校女子 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 順位 | 相関係数 | 順位 | 相関係数 | 順位 | 相関係数 | 順位 | 相関係数 |
| 適　性 | 2 | 0.673 | 1 | 0.793 | 1 | 0.733 | 1 | 0.801 |
| 将来性 | 1 | 0.727 | 3 | 0.481 | 2 | 0.730 | 4 | 0.451 |
| 収　入 | 3 | 0.635 | 2 | 0.589 | 3 | 0.616 | 3 | 0.496 |
| 技能習得の困難度 | 4 | 0.566 | 5 | 0.358 | 4 | 0.574 | 5 | 0.280 |
| 環　境 | 5 | 0.467 | 4 | 0.478 | 8 | 0.086 | 2 | 0.521 |
| 自律性 | 8 | 0.222 | 8 | 0.046 | 5 | 0.253 | 6 | 0.178 |
| 早朝・深夜の労働 | 7 | 0.230 | 6 | 0.162 | 7 | 0.165 | 7 | —0.037 |
| 日曜・祝日の休み | 6 | 0.240 | 7 | 0.160 | 9 | —0.021 | 9 | —0.153 |
| 疲　労 | 9 | —0.006 | 10 | —0.301 | 6 | 0.238 | 8 | —0.090 |
| 単　調 | 12 | —0.618 | 9 | —0.248 | 13 | —0.569 | 10 | —0.262 |
| 体の汚れ | 10 | —0.248 | 11 | —0.390 | 10 | —0.023 | 13 | —0.547 |
| 親の反対 | 11 | —0.592 | 12 | —0.434 | 12 | —0.419 | 12 | —0.498 |
| 社会的評価 | 13 | —0.795 | 13 | —0.503 | 11 | —0.341 | 11 | —0.444 |

適性や将来性，収入，それに親や世間の評価が，職業の好まれる順位と相関が高く，労働条件や仕事の性質は相関が低くなった。しかし，これは必ずしも好まれる要因としての重要度を示しているわけではない。いわゆる「見せかけの相関」の可能性があるからである。特に，親ないし世間の評価は，他の項目でイメージが悪いことによって低い評価が形成されることが多い。もちろん，低い評価が希望者を少なくさせるという側面もあるが，収入その他の悪いイメージが希望者を少なくし，同時に社会的な評価をも低めるという関係もある。このデータだけでは，それぞれの要素が独自に要因としてどの程度働いているかを確定することはできない。いずれにせよ「将来性」，「収入」，「親」や「世間」の評価が低いものは好まれる職業とはなっていない。しかし，労働条件である「日曜や祝日の休み」，「疲労」などに関するイメージがよくても，必ずしも好まれるとは限らない，という結果である。

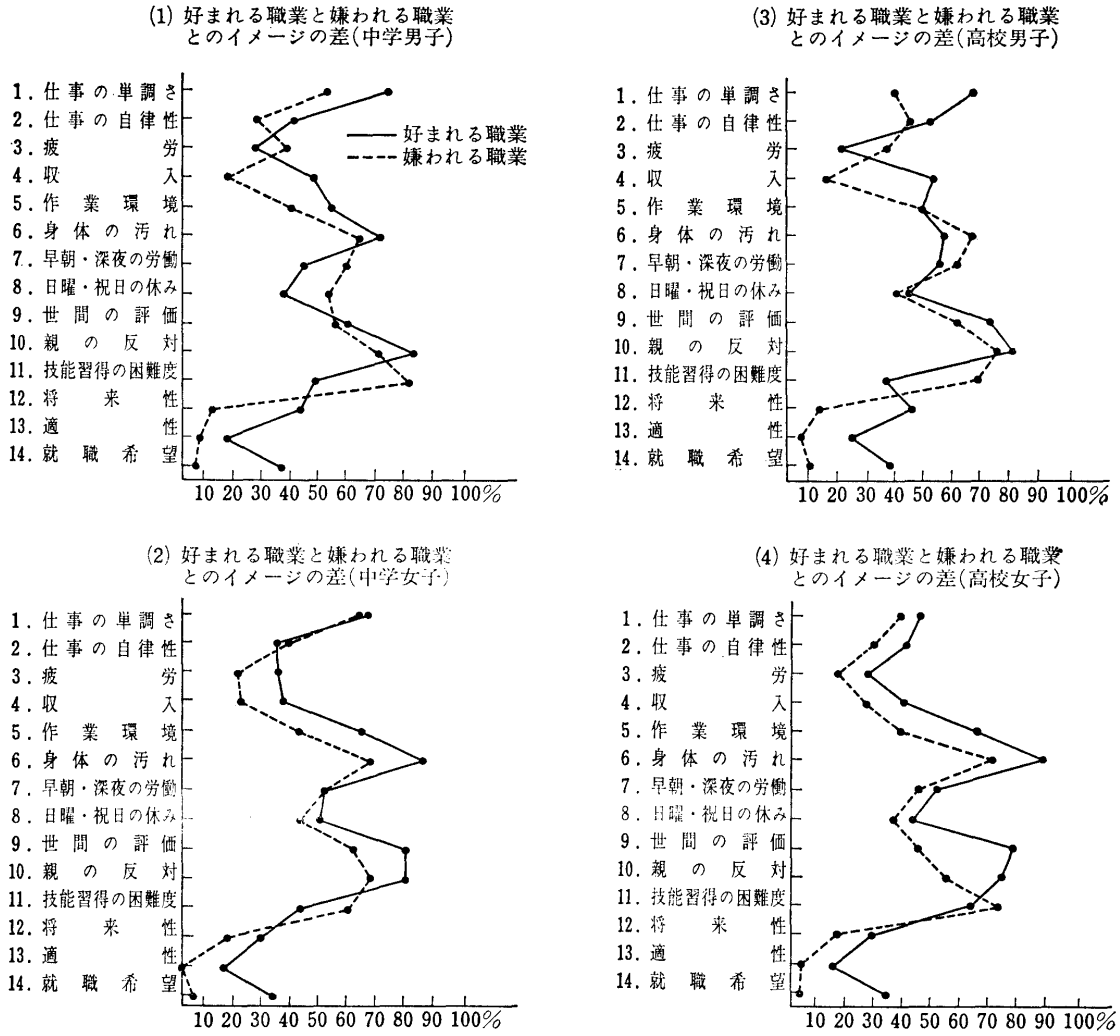
これは，男女一緒にみた場合であるが，男子と女子では若干異なっている。女子のほうが男子より強い相関を示しているものは「環境」，「疲労」，「体の汚れ」という項目で，女子のほうが男子より相関が低いのは「将来性」，「技能習得の困難度」，「単調さ」である。これから考えると，女性は仕事の内容そのものよりは環境や疲労をより重視し，男子は仕事そのものに関係する要素を重要視しているといえよう。

### 4—1　好れる職業と嫌われる職業のイメージ

職業の好き嫌いと職業イメージとの関係をあらわすために図—4のようなグラフを作成した。実線であらわされているのは「ついてもよい」と答えた人が多い順に上位5種の職業の平均イメージで，点線が下位5種の平均イメージである。このグラフでは，百分率が高いほど，すなわち右へ寄っていればいるほどよいイメージを示すようになっている。高校女子をみると，実線のグラフは点線のグラフよりほとんどの項目で右にきている。すなわち，好まれている職業は嫌われている職業よりも，ほとんどの項目においてよいイメージをもたれている。ただ一つの例外は「技能習得の困難度」であるが，これは困難だからといってただちにマイナスのイメージとはいい切れない特殊な項目である。このように好まれている職業は，いろいろな側面でイメージがよいというのはきわめて常識的な結果のように思える。

ところが男子のグラフをみると，必ずしもそうなっていないのである。高校男子では嫌われている職業のほうがよいイメージをもたれている項目が「疲労」，「体の汚れ」，「早朝・深夜の労働」，「技能習得の困難度」と実に4項目もある。これは男子では気に入った職業であれば，労働条件が多少悪かったり，仕事がきつかったりしても，つくことを希望することがあるけれども，女子では労働条件がよく，仕事がきつくない職業でなければ就職を希望しないことを意味している。

一般的にみた場合，男子は労働条件や仕事のきつさはあまり重要視していないのに対して，女子ではそれが他の項目と同じように重要視されているという結果であったが，次に看護婦の



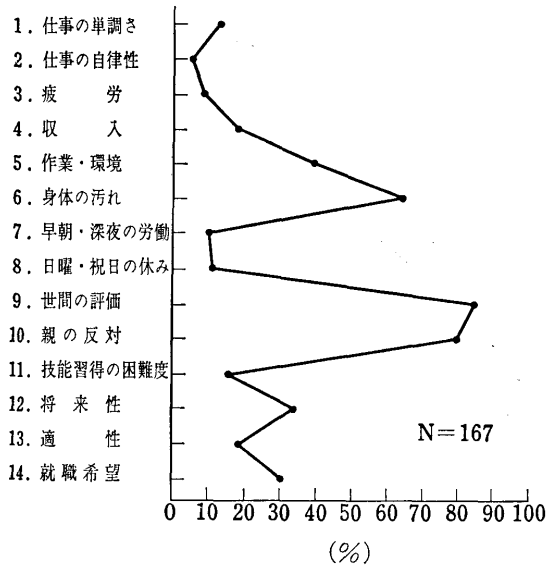

図—4

職業イメージをみてみよう。

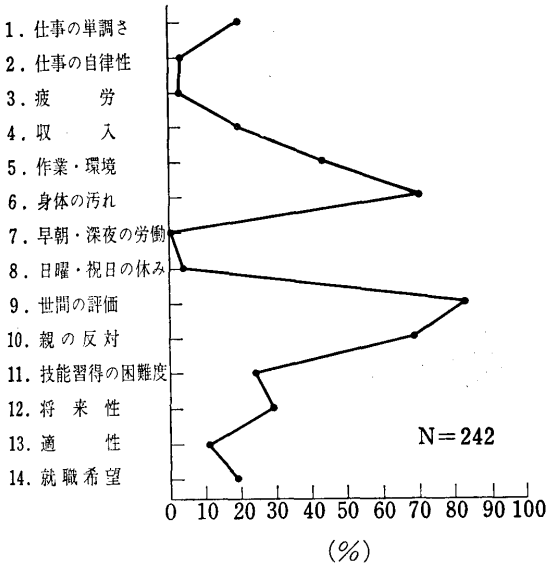
### 4—2 看護婦の職業イメージ

この調査による看護婦の職業イメージは，図—5，図—6にみられるとおりである。これをみると，高校生では，看護婦という職業は，仕事は単調でなく，体が汚れることは少なく，世間の評価は低くなく，親の反対は少ない。しかし，仕事に自律性がなく，疲れる仕事であり，早朝や深夜に働くことが多く，日曜や祭日でも休めないことが多く，必要な技能や知識を習得するには時間がかかる。収入も低い，というイメージをもたれていることになる。作業環境はまあまあというところであろう。中学生が抱いている看護婦の職業イメージもほぼ同じような型になっている。

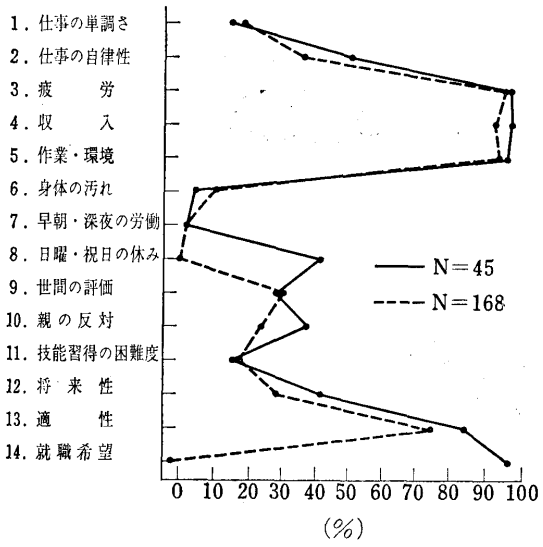
中学生と高校生では，職業イメージ(看護婦)



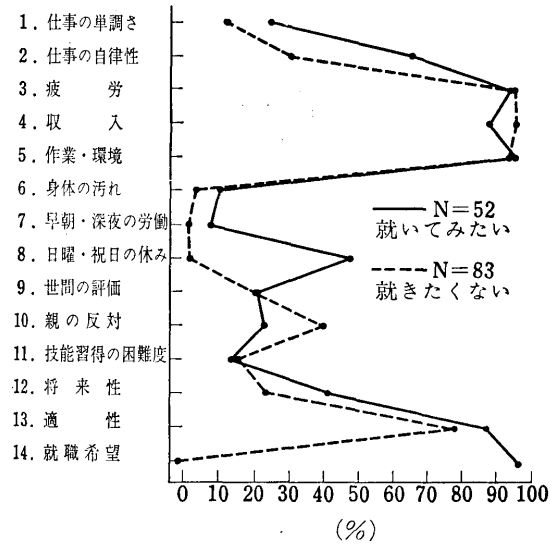

図―5(1)　看護婦のイメージ（中学女子）




図―5(2)　看護婦のイメージ（高校女子）




図―6(1)　ついてみたい職業とつきたくない職業のイメージ（中学女子）




図―6(2)　ついてみたい職業とつきたくない職業のイメージ（高校女子）

があまり変わりがないのに，「ついても よい」と答えた人の割合は先にみたとおり，かなり差がある。この差が生じた原因は，両者の職業イメージを比較したのではわからないので，図―6(1)(2)のグラフを作成した。このグラフは，実線が「看護婦になってもよい」と答えた人の職業イメージをあらわし，点線は「看護婦につきたくない」と答えた人の看護婦の職業イメージを示している。

まず，中学生の場合をみると，両者のイメー

ジで大きな差があるのは「仕事の自律性」と「日曜や祝日の休み」の二つである。あと若干差があるのは「単調さ」,「親の反対」と「将来性」である。もっとも「親の反対」はついてみたいという人のほうが親が反対するだろうという予想を多くしている。

高校生でも，ほぼ似たようなグラフが描かれている。希望者と非希望者で最も差が大きいのは「日曜や祝日の休み」で，これ以外の項目は差があってもかなり小さい。中学生で大きな差があった自律性は，高校生でも同じような差がみられるが，開きがずっと小さくなっている。この他多少開きのある項目は「親の反対」,「将来性」である。

結局，希望者と非希望者との職業イメージの差異は日曜・祝日の休み，自律性，単調さ，将来性といった点にあるといえる。これらのイメージの差異がこの職業を希望させるか否かの決め手になっているとは断言できない。ここにとりあげなかった項目で，大きな差異があるかもしれないからである。しかし，理論的に考えたとき，ここにあげた項目以外にイメージの構成要件として非常に重大なものがあるとは考えにくい。従って，イメージの差としては，上述のような差があるのであるが，ただ職業イメージから就職希望へと直接結びつくのではなく，現実的に考えた際の実現可能性などが介在してくると考えるのが妥当と思われる。

### 4—3 イメージ調査のまとめ

この調査によると，看護婦は好まれている職業と嫌われている職業の中間的な位置を占めている。職業の好みには，女性の場合は男子と異なって，仕事の内容そのものだけでなく，労働条件や労働強度が大きく影響している。看護婦の職業イメージはあまりよくなく，身体の汚れと世間の評価という点で高い評価を受けているにすぎない。看護婦希望者と非希望者とのイメージの差は，日曜や祝日の休みに関してであって，その他「仕事の自律性」,「将来性」などで若干ある。

「自律性」に関してはどちらのイメージがより現実に近いか微妙なところであるが，休日に関しては非希望者のほうが正確といえるであろう。従って，現実に職業選択をする場合になって，労働条件をより正確に知ったなら，おそらく希望者が減るであろうし，あるいは知らずにそのまま就職したら不適応をおこすことが予想される。

## 5. 看護学校在学生の意識

これまでにとりあげた調査研究は，いずれも一般の生徒を対象としたものであるが，次に看護学校学生を対象とした調査結果をとりあげる。彼らの特徴を探ることによって，看護婦志望と職業意識との関係の一端を明らかにできるであろう。

看護学校の学生の意識にふれるまえに，看護学校の状況について簡単に述べておこう。それが看護婦志望者の量と質に大きな影響を与えていると考えるからである。

最初にふれたように，看護婦養成施設は各種学校である養成所が多く，大学，短大，高校は少ない。これは，例えば栄養士などと比較すると大きな違いとなっている。栄養士の資格条件

は，高卒後２年の養成であるから，むしろ看護婦より低いのであるが，その養成施設は短大か大学がほとんどである。そして栄養士について不足は問題となっていない。

養成施設が各種学校であるか，いわゆる学校であるかは，希望者の数に大きな影響を与えるものと思われる。つまり，現在では進学熱が非常に高くなっており，かつ進学できる人が多くなっている。上級学校へ進学するか就職するかでは，明らかに前者に価値がおかれており，それが国民の各階層にまんべんなく浸透している。この場合，上級学校とは高校・大学であり，各種学校は考えられていないことが多い。特に看護婦養成施設のように，職業と密接に結びついたものは，その養成施設に入所すること即就職と考えられて敬遠される。それが栄養士のように短大，大学が養成施設になっているところでは，まず進学するという選択があって，その中でどの学科がよいだろうか，栄養士のように資格のとれるコースがよいであろう，といったプロセスになるのである。

養成施設は，病院の付属であるか医師会の設立であるものがほとんどである。医師会立は，主として開業医が自分の医院で働く看護職員を確保するために資金を出しあって設立したものである。いずれも在学中から，それぞれの病院，医院で働くので養成所に入るといっても就職するという感じが強くなる。特に医師会立の場合は，まず医院が採用し，彼女をそこへ送り込んでくるという色彩が強い。

### 5—1　看護婦養成施設への入学者

看護学校への志願者は現在減りつつある。例えば，３年制の看護婦学校の志願者は昭和43年までは増えていたが，その後徐々に減少してきている。准看護婦の場合も同様である。競争率も同じく低下してきているが，昭和48年の正看護婦学校では3.3倍，准看護婦は1.2倍である。この数字は，併願者がいるために実際より高くあらわれている。このように志願者が減ってきているから，質が低下してきている。

中卒で就職するものが減り，しかも女子の職場は拡大されてきているのであるから，看護婦の比重は相対的に低下せざるをえない。准看護婦の養成校では，合格率が100％に近いところが多い。志願者であれば中学時代の成績が極端に悪くても合格させるという例が医師会立などではかなりみられる。

准看護学校入学者は，すでに中卒で進学しないもののかなりの部分を占めている。昭和47年で就職者９万人（女子）のうちの1.53人，すなわち６人に１人が看護学校へ入ってきているのである。これ以上，この比率を高めるのは無理があろうと思われる。現在でも，中卒を資格とする准看護学校へ高卒者がかなり入りこんできている（４割，昭和48年）。

### 5—2　看護学校入学者の意識

各看護学校入学者については，断片的な調査はかなりあるが，まとまったものは少ない。これらの調査個々にではなく，まとめてみると看護学校入学者は地方出身者，農村出身者が多い（就職者が多いところと一致）。さらに出身家庭の職業別では農業，店員，自営業などが多く，例えば保母の養成施設ではサラリーマン家庭の出身者が多いのと対照的である。

また，看護学生は家族，親戚，知人に看護婦がいる場合が多く，看護学生がやや閉鎖的グループから供給されていることを示唆している。

ある調査では，准看護婦と正看護婦との区別を知らないで看護学校に入ってきているものが166名中62名もおり，必ずしも看護婦という職業について十分な知識をもたないで入ってきていることがわかる。看護学校へ入学する際に自分で決めたという人が6割，7割という数字で示されているが，准看護婦の場合だと15歳ぐらいであるから十分な指導が必要である。

彼女たちは看護婦という職業につこうとしているわけだが，それほどよい職業だと思っていない。小学校の教師や薬剤師よりも，社会的地位が低いと考えている。いくつかの調査で看護婦の社会的地位に対する不満が述べられている。

看護婦という職業については「尊い職業」か，それとも「一般の労働者と同じ」かという点では，過去と比較すると，後者が増えてきているが，現在でも前者のほうが2倍以上もある。都市化の進んだ地域では比較的「労働者と同じ」という答えが多くなっている。また「すべてを捧げ奉仕する仕事」か「生活を犠牲にする必要はない」かというと，後者が支配的であるが，年齢の高い人や地方では前者もある程度の賛同者をえている。

看護学校の学生を対象として行なわれたいくつかの調査結果を述べたが，ここにあらわれている傾向は，看護婦観が聖職的なものから他の一般的な職業と同じものだと考える人が増えていること，従って，生活を犠牲にする考えが減っていること，社会的評価に対する不満が強いことなどがあげられる。

## 6. まとめ

本稿では，看護婦の職業選択に職業観・職業意識がどのような影響を及ぼしているかをみるために，キャリア観，職業知識，職業イメージと職業の好き嫌い，看護学生の職業観をとりあげた。いずれも，直接的に看護職の選択と結びつけて論ずることが目的となっている調査ではないために，隔靴掻痒の感があるが，次のようなことはいえよう。

まずキャリアとして一生結婚しないで仕事に生きるタイプと，結婚しても仕事をずっと続けるタイプの二つは今後増えるとは予想されない。増えると予想されるのは再就職型である。

このことは，職業観の変化とも符合していて，看護婦を聖職視し，生活を犠牲にしてまでも奉仕する必要はないという人が増加してきている。

そして，職業の好き嫌いの要因をさぐると，女子は男性と違って，仕事の内容だけでなく労働条件や作業環境を重視している。

これらのことを考えあわせると，従来の看護婦，すなわち労働条件などはあまりよくないが，崇高でやりがいのある仕事である，ということで，若い人々を引きつけることは限界にきており，この看護婦像を訴えることによって，若い人々を入職させることは難しくなっていると思われる。このようなアピールに反応する人々の割合が特に増えないとするならば，看護婦は他のごく普通の職業と比較して一般の人にとって有利な職業だと考えられるようにならなければ志望者を増やすことは難しいであろう。